

東洋文庫所蔵本に押捺された蔵書印について（十二）

— 商賈・実業家・企業の蔵書印 —

中善寺 慎

既刊連載目次

- 一 朝鮮本に押捺された朝鮮の蔵書家の蔵書印 書報35号
- 二 僧侶・寺院の蔵書印、附神官・神社の蔵書印（上） 書報36号
- 三 僧侶・寺院の蔵書印、附神官・神社の蔵書印（下） 書報37号
- 四 国学者の蔵書印（上） 書報38号
- 五 国学者の蔵書印（下） 書報39号
- 六 漢学者・漢詩人の蔵書印 書報40号
- 七 学校・教育機関の蔵書印 書報41号
- 八 医家・本草家の蔵書印 書報42号

- 九 大名・藩主とその家の蔵書印 書報43号
 幕臣・藩士の蔵書印 書報44号
 十一 戯作者・操觚者・新聞社の蔵書印 書報45号

凡 例

- ・ 印影は縮尺任意の単色写真である。
- ・ 印文の縦の寸法をミリメートルの数字で掲げた。
- ・ 複数の資料に該当蔵書印を見い出せるものは、印影を採集した資料名に*印を付した。
- ・ 資料名につづけて、請求記号を丸括弧に包んで付した。
- ・ 蔵書家の伝記などは主として次の資料に依った。
 - 市古貞次「ほか」編『国書人名辞典』
 - 井上宗雄「ほか」編『日本古典籍書誌学辞典』
 - 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』
 - 国立国会図書館編『人と蔵書と蔵書印』
- ・ 配列は、印記所有者のよみの五十音順とした。

浅野セメント

セメント大手四社の一つ。明治六年（一八七三）に大蔵省土木寮建設局が東京深川に建設した撰綿篤製造所がその前身。明治十六年（一八八三）浅野総一郎が同所を借り受けて経営し、翌年には払い下げを受け、渋沢栄一と共同の匿名組合浅野工場として発足した。明治三十一年（一八九八）合資会社となり、大正二年（一九一三）浅野セメント株式会社に組織変更した。秘書課は大正九年（一九二〇）総務部の一課として設置され、のち昭和五年（一九三〇）重役直属の部署となる。この頃から活発化する海外進出に備えて、現地事情研究のための資料収集を行っていたのであろう。昭和八年（一九三三）以降、満洲や朝鮮半島に子会社が設立され現地での生産・販売を開始する。昭和十五年（一九四〇）重役直属の秘書課は廃止される。第二次大戦後は財閥解体令によって浅野家との関係がなくなり、昭和二十二年（一九四七）日本セメント株式会社と改称した。

「浅野セメント株式会社秘書課」（29）

『東三省地方法令』（XII-4-A-1-19）



石塚豊芥子（一七九九—一八六一）

江戸時代末期の考証家、雑学者。寛政十一年（一七九九）江戸神田の商家に生まれる。通称は重（十）兵衛。号は豊芥子・豊亭・集古堂・からし屋・巽隠士。屋号は鎌倉屋。江戸神田豊島町で芥子屋と称する粉屋を営むかたわら山東京伝、柳亭種彦らと交わり、近世文芸・風俗を研究した。生来古書を好み、軍書・地理書・演劇・遊郭関係の蔵書が多く、歌舞伎や遊里関係の著述がある。文久元年（一八六一）病没。墓は江戸本所法恩寺内専念寺。

〔石塚文庫〕（23）

『八百屋於七伝松梅竹取談』（VII—1—F—c—E—5）

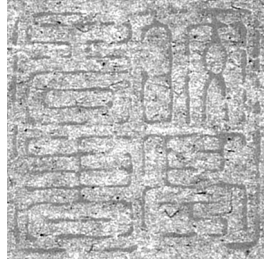
* 『一さうの水かかみ』（三—A—d—5）

〔豊芥「象」〔絵〕〕（24）

『八百屋於七伝松梅竹取談』（VII—1—F—c—E—5）

* 『一さうの水かかみ』（三—A—d—5）





内野皎亭（一八七三—一九三四）

明治・大正・昭和期の実業家。明治六年（一八七三）下総国海上郡野尻村の利根川廻船問屋滑川藤弥の三男として生まれる。名は悟。字は大悟。号は皎亭。明治二十八年（一八九五）内野喜助の長女こと子と結婚し内野五郎三と称した。兄の滑川澹如は書家・漢詩人。幼時より漢学に親しみ、のち吉田賢輔（竹里）の教えを受けた。詩友に森槐南・永坂石球がいる。東京米穀取引所理事、東京商業会議所議員。凸版印刷・日本漂白・東京蓄音機・東京殖産銀行・京浜電気・太平洋生命・太平火災・明治製革・内野農事等の役員を務めた。蔵書家としては田中光顕の後継者と目され、明治四十三年（一九一〇）稀観書一七部を譲り受ける。切支丹版・古活字版の収集で知られ、後年には官版の収集にも努めた。『近世儒林年表』『官版書目』を編纂刊行した。昭和九年（一九三四）没。蔵書は昭和十一年（一九三六）二度に亘る古書業者の入札により安田文庫・阪本龍門文庫・静嘉堂文庫・天理図書館ほかに四散した。

『皎亭吟者』（16）

『香草齋詩註』（IV-21F-5〇四）

『皎亭收藏』（30）

『香草齋詩註』（IV-21F-5〇四）

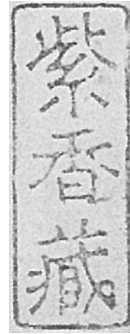
『皎亭図書』（32）

『香草齋詩註』（IV-21F-5〇四）

『東京麹町富士見町六丁目九内野五郎三』（54）

『官版書目』（II-1A-125）

* 『官版書目』（E-1〇二七・1-1コウ〇1-1〇〇1）



大久保紫香（一八六四—一九二六）

明治・大正期の素封家。元治元年（一八六四）生まれ。通称は源兵衛。東京日本橋亀島町に質屋を営む。のち八丁堀に隠居。椎園安田善次郎とも交流があった。市島春城は紫香を称して「軟派の親玉」と言う。国立国会図書館所蔵の紫香旧蔵書はおおむね国文学関係のもの。大正十五年（一九二六）没。

〔紫香藏〕（43）

『新刊多識編古今和名本草並異名』（Ⅷ四A一二）

* 『麓廼花』（X一五K一〇三二）

『女殺油地獄』（三F一aほ一イ八）

〔游戲三昧院（小）〕（60）

* 『古今類句』（Ⅶ二一K一〇一八）

『随葉集増補大全』（Ⅶ二一L一〇三七）

〔游戲三昧院〕（71） 『復鳥羽恋塚』（Ⅶ二一J一a五）

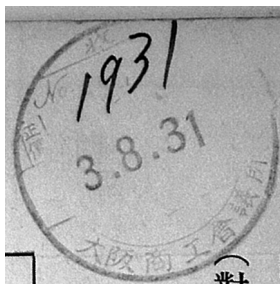
* 『故実拾要』（X一五H一〇三六）

大阪商工会議所

商工業者のため大阪に組織された経済団体。明治十一年（一八七八）に設立された大阪商法会議所がその淵源。明治二十四年（一八九二）大阪商業会議所となる。昭和三年（一九二八）大阪商工会議所に改組された。この体制は、昭和十八年（一九四三）大阪府商工経済会への再編まで続く。戦時経済の翼賛組織である商工経済会は第二次大戦後に廃止・解体され、昭和二十一年（一九四六）大阪商工会議所が再建され現在に至る。大正十一年（一九二二）開設の大阪商工会議所図書館は、江戸時代から明治期までの大阪経済資料を収蔵する。長らく閉鎖されていたが、社史・企業家の伝記類の蔵書は平成十三年（二〇〇二）開設の大阪企業家ミュージアムに引き継がれた。

「収□No.正価大阪商工会議所」(35)

『済南事件に対する支那側の逆宣伝』(八〇〇六)



大島雅太郎（一八六八—一九四八）

昭和初期の実業家。慶応四年（一八六八）日向国延岡藩の軍楽指南大島景保の長男として生まれる。号は景雅。東京高田馬場にあった居宅を青谿書屋と号した。藩校広業館の後身である亮天社に学び、慶応義塾正科を卒業。明治二十五年（一八九二）再度上京して三井銀行に入行する。明治三十三年（一九〇〇）退職後は、三井同族会事務局を経て、三井合名会社理事・台湾拓殖製茶・三井生命・三越呉服店・芝浦製作所などの要職を兼ねる。歌道を嗜み佐々木信綱に師事、池田亀鑑を顧問役に古典籍を収集した。昭和二十三年（一九四八）世田谷区野沢の自宅に没す。墓は台東区谷中。豊富な資金で蒐集した蔵書は戦後の財閥解体・経済変動で散逸した。そのうちの約五十点の旧蔵書が国立国会図書館に架蔵される。また、東京大学史料編纂所には戦前に寄贈された旧蔵の大島流兵法史料が収まる。



「大島氏図書」（23） 『蝦夷葉那志』（XI—五—J—1—〇三五）



岡本閻魔庵(？—一九一三)

明治・大正期の貿易商。横浜在住。本名は岡本久次郎。生年未詳。縁者の古書業者都築勇助の勧めから書籍収集の道に入り、古版本をはじめとする多くの古典籍善本を集め蔵書家として聞こえた。大正二年(一九一三)没。蔵書は大正十一年(一九二二)の売立により四散した。

「閻魔庵図書部」(36)

* 『大燈国師語録』(IV-F-1-1020)

『立斎先生標題解註音釈十八史略』(2-B-e-4)

『蔵乘法数』(2-C-b-4)

『方丈記』(3-B-a-27) ほか

「横濱」(20)

* 『年代紀略』(3-A-g-7)

『保元物語』(3-B-a-24)

「岡本蔵書」(39)

『大家文会』(XI-4-B-28)

『魁本大字諸儒箋解古文真宝前集』(2-B-d-2)

* 『蔵乘法数』(2-C-b-2) ほか

「岡本蔵書記」(65)

* 『羅湖野録』(2-B-b-76)

『列子虜斎口義』(3-A-a-24)

『五家正宗贊』(3-A-b-9) ほか



「閻魔像」(絵) 岡本堂 (70)

* 『大燈国師語録』(IV-四-F-1-10-20)

『祥刑要覽』(三A-11)

『棠陰比事』(三A-11)

『能花伝書』(三B-13) ほか

華北交通

日中戦争中に中国大陸の日本軍占領地の交通事業を一元的に統制運営した会社。昭和十四年（一九三九）華北・蒙疆地域の鉄道・自動車・運河・港湾など交通事業統制のため、北支那開発・南満洲鉄道・中国臨時政府の出資により資本金三億円をもって設立された。日華合弁の中国法人で、本社は北京に置かれた。創立に際して、東京市赤坂区虎ノ門に本社直轄の出先機関として東京事務所を設置し、日本政府および関係諸機関との連絡や資金資材調達の円滑化に努めた。翌昭和十五年一月には支社に昇格、昭和二十年（一九四五）四月に東京事務局と改められるまで、華北交通東京支社を称する。昭和十七年（一九四二）六月東京市麹町区内幸町に移転。昭和二十年の日本の敗北により華北交通会社は中国側に接收され、終戦と同時に東京事務局の公的記録・資料は焼却処分されたという。

「華北交通株式会社東京支社蔵書之印」（46）

『大總統黎元洪支那革命史』（二二七九）





咸亨堂

明治期の骨董商。新橋の土橋近くにいた好事の骨董商で、姓は村上氏。子息の忠吉は通称村忠といって芝の巴町にいたという。洒落本・黄表紙など軟派ものの蔵書が多い。象をあしらう蔵書印は石塚豊芥子を意識してのものと思われる。ほかに「骨董古雜籍珍書舖咸亨堂」と記す縦長の蔵書印が知られる。

「骨董舎〔象〕（絵）」（22）

* 『ただとる山のほととぎす』（三―F―a―と―ア―九）

『鼠の嫁入』（三―F―a―と―イ―一〇（二））



神田香巖（一八五四—一九一八）

明治・大正期の素封家・漢詩人。嘉永七年（一八五四）京都に生まれる。名は信醇。字は子醇。醇とも称した。号は香巖。書齋名を容安軒と称す。代々両替商「津国屋」を営む有力な京都の町衆の家柄で、真宗大谷派（東本願寺）長徳寺の檀徒であった。江馬天江の門に詩を学び、西京三才子の一人に数えられる。古写本・古書画の収集・鑑識に長じる。京都帝室博物館学芸員を務めた。大正七年（一九一八）没。漢詩集『夕陽紅半楼小稿』がある。孫の神田喜一郎（幽齋）により、家蔵の神田家伝来文書や金石拓本、香巖幽齋二代に亘る蒐集の旧蔵書が大谷大学に寄贈されている。

〔香巖〕（19） 『綿津山人詩集』（IV-11F-四七五）

〔香巖三十年精力所聚経籍金石书画記〕（29）

〔莊子南華真経〕（III-131-1）

〔列子冲虚真経〕（III-131-1）

* 『贅箋唐詩絶句精選』（IV-11A-123）

* 『贅箋唐詩絶句精選』（IV-11A-123）

〔蘭亭帖〕（XI-113-0）

* 『莊子南華真経』（III-131-1）

〔列子冲虚真経』（III-131-1）

〔神田醇印〕（22） * 『綿津山人詩集』（IV-11F-四七五）

〔東方朔画賛』（XI-112-18）



「神田醇子香巖」(23)

『莊子南華真經』(Ⅲ-131)

『列子冲虚真經』(Ⅲ-131)

* 『贅箋唐詩絕句精選』(Ⅳ-182)

「神田醇子醇氏」(26)

* 『莊子南華真經』(Ⅲ-131)

『列子冲虚真經』(Ⅲ-131)

「夕陽紅半要」(54)

『東方朔画贊』(Ⅺ-228)

「夕陽紅半要」(20)

『綿津山人詩集』(Ⅳ-147)

木村兼葭堂（一七三六—一八〇二）

江戸時代後期の博物学者。元文元年（一七三六）大坂北堀江で代々酒造業を営む豪商の家に生まれる。父重周が木村家を嗣ぐ。名は、初め鶴、のち孔恭。字は、初め千里、のち世肅。通称は坪井屋吉右衛門・多吉郎・太吉。号は巽斎・遜斎・兼葭堂。酒造業を営むかたわら学芸を好み、津島桂庵・小野蘭山に本草を、片山北海に漢詩文を、大岡春卜・僧鶴亭・池大雅に絵を、篆刻を高芙蓉に学ぶなどした。ひろく書画骨董や珍品奇物の収集と考証に努め博学多識をもって聞こえ、多くの文人がその名声を慕って来遊した。また、善本の復刻にも意を用い兼葭堂版と称される。享和二年（一八〇二）没。墓は大坂小橋寺町（現天王寺区）の大応寺。没後その龐大な蔵書は幕府に献納され、旧蔵書は国立公文書館内閣文庫などに襲蔵される。著書に『禽譜』『奇貝図譜』、蔵書目録に『兼葭堂書目』がある。大正十五年（一九二六）発足の『兼葭堂会』は、事務局を大阪南区長堀橋の高島屋呉服店内に置いた。

〔兼葭堂印〕（18）

〔皇輿全図〕（II-11-L-167）

* 〔六物新志〕（XV-11-120）

〔兼葭堂蔵書印〕（44）

〔佐渡国物産図譜〕（XV-31-B-a-111）

〔兼葭堂秘不許出圖外〕（26）

〔皇輿全図〕（II-11-L-167）



木村素石（一八四三—一九〇三）

明治期の実業家・俳人。天保十四年（一八四三）周防国山口藩士の家に生まれる。名は正幹。号は月の本素石・素石園。維新後は京都府に出仕し大属となる。明治六年（一八七三）貿易商社先収会社に益田孝らと入社。明治九年（一八七六）三井物産会社設立とともに初代副社長に就任した。以来、社長益田孝を助けて才腕を揮い、今日の三井物産の基礎を築いた。明治二十六年（一八九三）常務理事。明治二十八年（一八九五）三井家を代表して東京電燈に入社、取締役社長に就任する。晩年は役職を去り、俳諧・古書収集を趣味とした。明治三十六年（一九〇三）没。『素石園素石遺稿集』がある。

〔素石園木村蔵〕（32）

〔朝鮮征伐記〕（VII-21F-a-11）

〔蒼香山房之印〕（26）

〔唐路賓王詩集〕（XI-4-A-11）

〔続三綱行実図〕（XI-4-B-11）

〔朝鮮征伐記〕（VII-21F-a-11）

〔いろは醉故伝〕（VII-21F-f-16）

〔縮林宝訓〕（21-B-b-90）

* 〔論語〕（21-C-a-15）





小島必端（一七四六—一八〇九）

江戸時代中期の金融商。延享三年（一七四六）江戸蔵前の札差の家に生まれる。名は範。字は洪卿。通称は西之助。修姓は島。号は必端（堂）・万卷楼。屋号は小島屋。漢学を好み書を能くして、市河寛齋や大典禪師と親交があり、高芙蓉に篆刻を学び一家をなした。印譜に『玉島精舎印集』がある。江戸の篆刻家の中心的な役割を果たした。また蒐書家としても知られ、多くの書画珍籍を蔵した。文化六年（一八〇九）没。墓は江戸浅草寺修善院（のち今戸慶養寺）。

〔島範家蔵万卷〕（23）

〔皇宋事宝類苑〕（三一A—三二）

〔必端堂図書記〕（29）

〔皇宋事宝類苑〕（三二A—三三）

斎藤雀志（一八五一—一九〇八）

明治期の実業家・俳人。嘉永四年（一八五二）江戸日本橋駿河町に生まれる。名は銀蔵。号は雀志。三井呉服店番頭から三井銀行行員となり、横浜支店長を勤めたのち退職して文墨に専念した。八世雪中庵服部梅年の門に入り、老鶯巢五世を継ぎ、さらに明治二十一年（一八八八）九世雪中庵を継承する。多くの門弟を擁し、古俳書の収集で名高く、柳亭種彦の旧蔵書などを有した。没後その多くは大野洒竹の所蔵となり東京大学総合図書館に現存する。明治四十一年（一九〇八）没。編著に『嵐雪全集』などがある。

「斎藤文庫」(22)

* 『志みのすみの物語』(VII—F—148)

『紫の一本』(XI—C—67)

『是楽物語』(三—F—134)

『高野山女人堂心中万年草』(三—F—118)

『春駒象碁行路』(三—F—146)

『雪中庵』(21) 『紫の一本』(XI—C—67)



高島屋

三越と並ぶ百貨店の老舗。本社は大阪市南区。天保二年（一八三一）創業。安政二年（一八五五）呉服商となる。明治三十年（一八九七）には東京に出張所を開設。高島屋飯田合名会社を経て、大正八年（一九一九）株式会社高島屋呉服店となり、以後本格的な百貨店業を目指した。東京日本橋店の完成は昭和八年（一九三三）。高島屋東京支社発行の社内報『高苑』七一号の表紙には、昭和三十六年（一九六一）当時の高島屋が描かれる。この社屋は平成二十一年（二〇〇九）国の重要文化財に指定された。三越とともに戦前から美術関連事業にも積極的であり、昭和四十五年（一九七〇）大阪市浪速区の高島屋東別館に設置された高島屋史料館には、創業以来の美術工芸品等約二万点の史・資料コレクションが保存・展示される。掲出の蔵書印にあしらわれている高島屋のロゴマークは創業時から暖簾に使われており、明治三十七年（一九〇四）商標登録されている。

〔参考室所蔵〕（55）『聴松齋主人伝』（X151-L1474）





竹内篁園（一八七六―？）

明治期の実業家。明治九年（一八七六）伊勢桑名に生まれる。名は文平。号は篁園。電鉄会社の取締役を務めた。筆跡ものの蒐集で知られる。没年不詳。

「篁園文庫」（37） 『職原抄』（XII―三―D―d―一〇一〇）

田中玄蕃

江戸時代の醤油醸造家。代々田中玄蕃を襲名し醤油醸造業（商標ヒゲタ）を営む。元和二年（一六一六）摂津国西ノ宮の豪商真宜九郎右衛門に勧められて農閑期の余業として溜醬油の醸造に手を染めたのが始まりと伝える。元禄（二六八—一七〇四）期前後より銚子の醤油醸造業は発展し、宝暦三年（一七五三）には醤油仲間が結成されている。文化文政期（一八〇四—一八三〇）には江戸の醤油需要が急増し、第九代玄蕃（一七四〇—一八一。通喬）が田中家を隆盛に導き、その長男第十代玄蕃（一七七八—一八四九。名は貞矩。字は敬夫。通称は順治。号は百路）は盛運の維持に努め、有力醸造家の地位を築いた。大正三年（一九一四）には、田中家・深井家・浜口家の三家により銚子醤油合資会社（のちのヒゲタ醤油株式会社）を設立。ただし現在は商標のみを残して田中家の経営を離れている。銚子の貴重な郷土資料である「玄蕃日記」など五五冊が田中家文書として伝わる。昭和六十年（一九八五）銚子工場内にヒゲタ史料館が設けられている。

「銚子飯沼村田中玄蕃」(29) 『語園』(II—I—E—100—1)





筒井喜一郎（？—一九四〇）

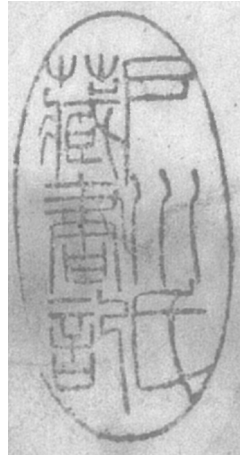
大正・昭和期の実業家。伊賀上野に生まれる。生年不詳。号は緑溪。父の業を継ぎ酒造業を営む。八十三銀行、百五銀行、三重農工銀行の各重役を務めた。小谷虔斎の門下で、詩文を能くし、近世邦人漢詩文集の蒐集で知られる。昭和十五年（一九四〇）没。『緑溪斎詩集』がある。旧蔵書は、没後に沖森書店により売立てられた。

「栄郭斎蔵」（29）

『栲亭初稿』（Ⅶ―Ⅳ―B―一七六）

* 『栲亭二稿』（Ⅶ―Ⅳ―B―一七六）

『栲亭三稿』（Ⅶ―Ⅳ―B―一七六）



戸川浜雄

大正・昭和期の実業家。戸川残花の長男。生没年未詳。名は浜雄（浜男）。号は賓南。父残花（名は安宅。一八五五—一九二四）は旧幕臣で、のち評論家・詩人。「残花書屋」は父残花の印を譲り受けて使用したものである。



「戸川氏蔵書記」(56)

『護法論』(XI—四—A—八)

「残花書屋」(45)

『護法論』(XI—四—A—八)

「賓南(小)」(10)

『護法論』(XI—四—A—八)

「賓南(大)」(21)

『護法論』(XI—四—A—八)



永田文庫

永田有翠（一八六七—一九二一）

明治・大正期の実業家。慶応三年（一八六七）大阪東区伏見町に生まれる。名は春意。通称は好三郎。祖父以来の名家である今橋の鴻池本家に勤仕し、鴻池銀行京都支店の管理にあたる。明治三十三年（一九〇〇）辞職後は大阪南郊の天下茶屋に移り町役場助役を務めた。生来の書物好きで、浜和助・水落露石・平瀬露香・加賀豊三郎・幸田成友・木崎尚らと愛書家の集まりである「保古会」を結成している。蔵書に富み、その収書範囲は近世文芸全般にわたった。多趣味・多芸で俳句を能くし、ほかに金石文拓本・古版画・古銭・藩札・隣寸箱ラベルなどの蒐集にまで及び、天下茶屋玉出町の自宅は膨大なコレクションで埋まったという。大正十年（一九二一）没。蔵書は二回にわたる売立で散逸した。

「永田文庫」（30） * 『米庵藏筆譜』（IX—四—C—一—五八）

『魁本大字諸儒箋解古文真宝後編』（三—A—e—六）

『水鳥記』（三—F—i—a—ろ—三—二）

『いせ道中』（三—F—i—a—と—i—ア—一—二）

『曾我兄弟十番切』（三—F—i—a—と—i—イ—一—〇—九）

『劇場奇観』（三—G—i—d—は—七）

『守貞謾稿』（三—H—i—a—は—三—二）ほか



檜崎海運 (?—一九〇〇)

明治期の紙商。万延元年(一八六〇)頃の生まれ。奈良屋正兵衛。正兵衛。東京市日本橋区坂本町の築地海運橋傍らに紙類販売店を構える。文人グループの根岸派に名を連ね、明治期に活躍する文士達と交流を持つ。本業の傍ら黄表紙や洒落本など軟派ものの珍書の蒐集家で知られた。明治三十三年(一九〇〇)没。膨大な蔵書は売りに出され散逸した。旧蔵書中の黄表紙は加賀豊三郎の手を経て都立中央図書館に現存する。

「家在海運橋東檜崎氏」(30)

『北里十二時』(IX—四—C—二四八)

『檜崎文庫』(27) 『役者用文章』(VII—二—F—e—九)

日本種苗

明治四十年（一九〇七）創設の種苗販売業者。前身は明治二十一年ころ設立の耕牧園。耕牧園・早稲田農園・学稼園の三大種苗業者の営業を合同・継承し、社長は元耕牧園園主の井上龍太郎。資本金は七十万円。東京府豊多摩郡淀橋町角筈に開業する。農業技術書の出版も手がけ、園芸雜誌兼通信販売用目録の『農事新報』を刊行した。大正十年代前半（一九二一—一九二六）に合資会社に組織変更し淀橋区柏木に本社を置く。

「日本種苗株式会社図書之印」（30）

『本草綱目』（Ⅲ一六—B一二四）





浜和助（一八四六—一九一一）

明治期大阪の商人。弘化三年（一八四六）生まれ。摂津国三島郡三箇牧の人。号は真砂。大阪淡路町に質商を営む。珍書持ちとして知られ、近世名家自筆稿本の蒐集家。永田有翠ら大阪の愛書家とともに「保古会」を結成。明治四十四年（一九一一）没。墓は高槻市柱本興楽寺。

〔浜和助〕（31）

『武野八景』（XI—五—C—七七）



林忠正（一八五三—一九〇六）

明治期の美術商。嘉永六年（一八五三）越中国高岡の医家長崎言定の次男として生まれる。幼名は志芸二（重次）。のち富山藩大参事林太仲の養嗣子となり忠正と改める。明治三年（一八七〇）富山藩の貢進生となり上京、大学南校に入学生フランス学を修める。明治十一年（一八七八）パリ万国博覧会の出品会社社員としてパリに渡る。その後パリに留まり、同地で美術品店を開業、明治十七年（一八八四）若井兼三郎と共同で欧州における日本美術、特に浮世絵の普及に努める。明治三十三年（一九〇〇）パリ万国博覧会事務総長。ゴンゲール兄弟やモネ、ドガら印象派の画家と親交があった。明治三十八年帰国。明治三十九年（一九〇六）東京で病没する。昭和四年（一九二九）旧蔵書の売立。「林忠正所蔵印」は真偽に疑いがある。

「林忠正」（8） * 『今様職人尺歌合』（VII—TK—B—四三）

『伊勢物語』（三—B—a—七）

『ただとる山のほととぎす』（三—F—a—と—ア—九）

『咲分ヶ言葉の花おしゃべりにくまれ盛り』（三—G—b—一—四）

「林忠正印」（26） * 『麓廼花』（X—五—K—一—〇—三—一）ほか

「林忠正所蔵印」（25） 『おさな源氏』（VII—二—F—a—二—六）

* 『北里十二時』（IX—四—C—一—二—四—八）

『写真花鳥図会二編』（XV—三—B—a—四—二）

三菱銀行

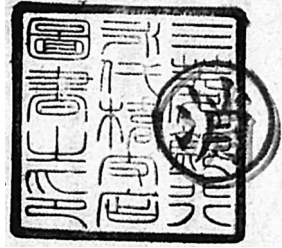
日本有数の都市銀行。三菱商事と並んで三菱グループの中核を担う。明治十三年（一八八〇）郵便汽船三菱会社が創設の三菱為替店をその前身とする。明治二十八年（一八九五）経営不振の第百十九国立銀行を子会社化し三菱合資会社の銀行部として開業。大正八年（一九一九）分離独立して株式会社三菱銀行となる。以来、三菱財閥の機関銀行の役割を果たす。昭和十八年（一八四三）第百銀行を合併し事業内容を拡大した。第二次大戦後は財閥解体のため苦境に立たされ、昭和二十三年（一九四八）千代田銀行と改称するが、昭和二十八年（一九五三）旧行名に復帰。その後、平成八年（一九九六）東京銀行と合併し東京三菱銀行と改称する。

永代橋支店の淵源は古く、その前身の深川出張所は三菱合資会社銀行部の発足時の開業である。大正五年（一九一六）支店に昇格。大正十二年（一九二三）の関東大震災で被災し、昭和四年京橋区南新堀（のち表記変更で京橋区新川）に店舗を新築移転、店名を永代橋支店と改称した。以降、永代橋支店の名称は、昭和四十五年（一九七〇）桜橋支店に業務を継承して廃止となるまで用いられた。

『三菱銀行永代橋支店図書之印』（31）

『大連の金融及為替事情』（三三七二）

『永代橋支店』（45）『大連の金融及為替事情』（三三七二）





三村竹清（一八七六一—一九五三）

明治・大正・昭和期の商家。明治九年（一八七六）東京市京橋区八丁堀仲町に生まれる。名は清三郎、また齋。祖父の代からの竹屋で、商号は竹屋。書画・篆刻・和歌・狂歌などに造詣が深い。近世文人の研究に秀で、好古趣味の会合「集古会」の幹事として『集古』の編集にあたる。昭和二十八年（一九五三）没。晩年の蔵書の一部が二松学舎大学にある。蔵書印は多数が知られる。

「十文字文庫」（30） 『睡余小録』（II—1E—1〇—326）

* 『曲亭書簡集』（VII—2N—16）

「竹清」（12） 『曲亭書簡集』（VII—2N—16）



宮川曼魚（一八八六—一九五七）

明治・大正・昭和期の料理屋。本名は渡辺謙次郎。明治十九年（一八八六）東京日本橋の鰻屋「喜代川」に生まれる。のち深川門前町の鰻屋「宮川」を継ぐ。家業のかたわら江戸文学に親しみ、江戸風俗の研究に従事すると同時に軽妙な随筆の書き手としても知られる。黄表紙・洒落本を収集。邦楽の研究家でもあった。昭和三十二年（一九五七）没。著書に『江戸売笑記』等がある。

「漁魚文庫」（35） 『異人恐怖伝』（XI—五—A—一〇〇—一）

「曼魚」（17） 『江戸売笑記』（X—五—H—b—七七）

「曼魚文庫」（54） 『笑ぞめ』（VII—二—F—e—四）



宮島六鼠

明治期の商賈。生没年不詳。名は藤吉または伝蔵。俳号は六鼠。東京本所双葉町に薬舗「源泉堂大通丸舗」を営業。奇書珍本の持ち主として著名であった。静嘉堂文庫に旧蔵書が多く収められ蔵書目録もある。

「宮島文庫」(25) * 『姫路瓦譜』(X151K11009)

『早道御守伝来』(31F1a1と1ウ114)(113)



村井敬義（一七四一—一七八六）

江戸時代中期の呉服商・国学者。寛保元年（一七四一）京都生まれ。邑井・邨井とも。名は敬義。通称は新兵衛。号は古巖・勤思堂。屋号は菱屋。初め呉服商を営む。国学を好み、古書を愛し、奇書珍本を数多く蒐集、遂に書籍商に転じた。天明四年（一七八四）蔵書三千七百余部を選んで伊勢林崎文庫に奉納した。天明六年（一七八六）奥州に遊び塩竈神社祠官藤塚氏宅に客死。没後、弟の村井忠著の手により塩竈神社に手元になお残留していた蔵書が納められた。墓は陸前塩竈雲上寺。

提出印の下部は、資料の小口が截断された際に失われた。

「村井敬義」（22）『佐渡国物産図譜』（XV—B—1—12）



桃木武平（一八五八—一九二九）

明治・大正期の海運業者。安政五年（一八五八）摂津国八田部郡神戸村に生まれる。兵庫北浜で代々造船業を営む家を嗣ぎ、廻船問屋の経営や船舶用材木の売買を行なった。明治中期には市会議員も務める。傍ら国史の研究に勤め、とりわけ造船史に関心を持ち、海事関係の資料を蒐集した。京都大学に発足した関西文庫協会の会員としても積極的に活動し、明治三十五年（一九〇二）葺合生田町の自邸に私設図書館「桃木書院」を開設するなど神戸における図書館運動の先駆者でもあった。東出町に移転した後、桃木書院は明治四十三年（一九一〇）に閉館するが、この時に神戸開港関係文書二六〇点が神戸市立図書館に寄贈されている。残る旧蔵書の古典籍類は京都大学への寄託を経て、昭和四年（一九二九）台北帝国大学の購入するところとなり、現在も国立台湾大学に「桃木文庫」の名称で五七〇点約五千冊の貴重書が現存する。海事史料研究のため赴いた台湾で昭和四年病没した。

「桃木書院蔵（長方印）」（45）

* 『三國地志』（XI—五—C—六〇）

『元祿御役武鑑』（XII—三—D—四八）

『元祿八刊武鑑』（XII—三—D—五〇）

「桃木書院蔵（方印）」（42） 『三國地志』（XI—五—C—六〇）

「武平」（9） 『万葉集』（五—C—四）



森五郎作（一八八八―？）

神奈川県川崎の実業家。幼名は三郎。明治二十一年（一八八八）川崎宿の名主・問屋役・年寄役などを務めた旧家に生まれる。昭和十五年（一九四〇）より川崎商工会議所議員。祖父の五郎作（？―一九〇九）は、砂糖商藤屋を経営し民権家としても活躍。父安治郎（一八六三―一九四二）は初代川崎市会議長を務めた。六郷橋南詰にあった味のデパート藤屋百貨店は昭和二十年（一九四五）戦災で焼失、戦後は砂糖・小麦粉等の卸売業を営んだ。掲出書は、開国百年記念文化事業会寄贈資料。昭和三十二年（一九五七）森家転居の際に流出したものか。近世川崎宿の姿を伝える森家文書一一五六件が川崎市市民ミュージアムに収蔵される。

「藤屋文庫」（54）

『ブチャーチン軍艦図巻』（I-I-E-134）

ヤマサ醤油

千葉県銚子市に本拠を置く醤油を中心とする調味料製造業者。正保二年（一六四五）広屋儀兵衛商店として創業、醤油醸造を開始する。当主は代々浜口儀兵衛を襲名する。明治三十二年（一八九九）合名会社浜口商店に改称。同時に醤油研究所を創設し合理的で衛生的な醤油醸造の研究に着手した。これは日本最初の私立の醤油研究所であった。明治三十九年（一九〇六）には優秀な職工を養成するための私立職工補習学校を設置する。昭和三年（一九二八）株式会社に組織変更し、ヤマサ醤油株式会社と名称を改める。昭和十五年（一九四〇）新京に満洲ヤマサ醤油株式会社設立。海外進出に備えて現地事情等の研究が必要とされ、当時収集された膨大な資料群が「ヤマサ史料」として保存・公開されている。

「ヤマサ醤油図書室備付」（30）

『高島屋百年史』（XVII—1—F—144）



横浜正金銀行



第二次大戦前の特殊金融機関の一つ。明治十三年（一八八〇）国立銀行条例に準拠して設立された。横浜正金銀行調査課は明治二十八年（一八九五）内規によって設置された。内外の貿易・財政・金融・商況・その他重要事項の調査、『行報』『通報』『調査報告』『調査資料』など行内刊行物による調査報告、業務遂行に必要な図書の収集・整理を職務としている。昭和十六年（一九四一）頭取席事務改正により調査部に改称される。第二次大戦後は連合軍の勸奨もあつて普通銀行に改組され昭和二十一年（一九四六）株式会社東京銀行として再発足した。東京銀行に引き継がれた旧横浜正金銀行調査部の蔵書は、昭和三十四年（一九五九）及び翌年に東京大学東洋文化研究所に（一部は東京大学経済学部図書館に）、平成八年（一九九六）神奈川県立歴史博物館に、寄贈されている。

「横浜正金銀行調査課図書」（32）

『中国に於ける農村手工業』（四六三七）

